

# 前期ウィトゲンシュタインの幸福論

—「幸福に生きよ！」—

井原 奉明

## はじめに

ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(以下、『論考』と略記)は、紛れもなく20世紀哲学史上に燦然と輝く金字塔である。簡潔にして易、真理が凝固したような詩的短文を断言調に連ねるその学理は明快かつ明晰にして真意を損ねることなしと一見思われるが、時代時代の潮流に従って、さらに読み手の独創的な着想によって、これまで数多の解釈を生み出してきた。例えば論理実証主義の聖典のごとく読む解釈、反実証主義の流れに位置づけて読む解釈、ドイツ観念論の枠組みの中でカントやショーペンハウエルに即して読む解釈、徹底的な現象主義的観点から読む解釈。さらに『論考』は形而上学の書であるとみなす註釈に、中立一元論(純粹経験を基底に置く考え方)を説く註釈、解釈学的論究、心理主義的論考、神秘主義的考察、諸思想家との比較研究、禅との比較論、人工知能の嚆矢とみなす評釈、昨今人気の弁証法的読解に至るまで、多様な解釈が生み出されてきた。中には、哲学、人文学を離れ、神韻縹渺たる芸術作品であるかのように『論考』を捉える視点も登場している。

『論考』に関する研究の数の多さは、稀有の魅力を湛えたこの書が真摯な検討に値すると認められている証である。而して、『論考』は多元的な解釈を許す点でも哲学史上の偉大なる作品に比肩する。発行以来80有余年、その深意を巡って今なお解釈が積み重ねられ、積極的に議論が戦わされている『論考』は、すでに(狭義の)古典と呼ぶに相応しい。では、そのような『論考』に決定的な、唯一の正しい読み方があるのであろうか? それともテキスト理論のいうように、「読み」は多様に「開かれている」のであろうか?

私はこれまで反形而上学の立場から『論考』を読んできた。正確に言うと、可能性の實在といった存在論的措定において反形而上学的立場を貫いて、『論考』を整合的に読もうとしてきた。今もそれは変わらない。「可能性は思考においてしか存在しない」というテーゼは『論考』において首尾一貫しているばかりか、その後の『哲学的考察』『青色本・茶色本』『哲学探究』等においても変化していないと思う。しかし、そのような視点を取るから、いや取ればこそ、『論考』の終盤に展開される生や主体、幸福についての断章を取り上げて論文を書くことは絶えてなかった。存在論について論陣を張ることはあっても、超越論的なものについて自説を展開することはなかった。とはいえ、そのようなテーマを不問に付していたわけではない。先行研究を踏まえ、自分なりに『論考』の、前期ウィトゲンシュタインの幸福論を考えてきたつもりである。

今回、この小論では『論考』およびそれに先立つ「草稿」時期の、いわゆる前期ウィトゲンシュタインの生・幸福論を主題とする。時間論を中心に『論考』を深く討究するうち、幸福に関するウィトゲンシュタインの考えを新たな視点から考察できるようになり、生や幸福についての整合的な解釈にようやく辿り着けたように思うからである。<sup>(1)</sup>そして、その解釈は独創的主張を含んでいる点で公

表し検討に付す意義があると思われる。短い論考ではあるが、生や幸福について前期ウィトゲンシュタインが言わんとしているところを浮き彫りにしてみたい。(2)

### 1) 前期ウィトゲンシュタインの幸福論を考察するための予備的理解

『論考』の考察は、「論理に関する考察」と「生と主体に関する考察」に二分できるが、分量的に見ればまったく対等ではなく、後者は前者の三十分の一にも満たない。しかし、だからと言って後者の重要性が減ぜられるわけではない。それどころか『論考』の狙いは後者にあることを明確に物語るテキストがある。ひとつめは『論考』の序文、それからラッセル宛の手紙、そしてフィッカー宛の手紙。そのいずれにおいてもウィトゲンシュタイン自らが『論考』の意味を倫理的なものだと明言している。

『論考』の意味が倫理的なものであったとするなら、なぜ倫理を扱う分量が少ないのだろうか？ウィトゲンシュタインがその理由を、倫理は語るることができないからだとして記したことはよく知られている。しかし、私たちは日常生活において「〇〇をせよ」「××をしてはならない」と倫理的に語っているし、そう語ることに何の問題もないように思われる。一体なぜ「倫理は語るができない」のであろうか？

『論考』においてウィトゲンシュタインが《語る》と《示す》を区別したことはつとに知られている。言語によって表現できるものを言語によって表現する(記述する)ことを《語る》、言語によって表現しえないものを、言語表現(記述)されたものを通して窺い知ることを《示す》と彼は呼んだ。この区別は『論考』の基本問題と密接につながっている。「私にはどれだけのことが考えられるのだろうか？」これこそが『論考』の基本問題であるが、ウィトゲンシュタインは、思考に限界を引くことによって、思考できるものを(直接的に)明らかにし、思考できないものを(間接的に)照らし出そうと考えた。ただし、「どれだけのことが考えられるのか」という問題に対し、再び《思考》を持ち出して、それによって答えようとすれば循環論に陥ってしまう。よってウィトゲンシュタインは、思考の限界を明らかにするために、その置換物たる言語を持ち出し、言語の限界を明らかにしようとする。(3)つまり、「私にはどれだけのことが考えられるのだろうか」という問いは、「私にはどれだけのことが語りうるのだろうか」という問いで置き換えられることになる。

ウィトゲンシュタインによれば、言語によって《語り》うるのは、世界の事実や可能性のみであり、それ以外の《語り》えないものやことについては「沈黙しなければならない」(『論考』7)。哲学的問題は、世界の事実や可能性の記述でない以上思考不可能な問題なのだから、言語によって問うことがそもそもできない。論理命題や数学の等式、自然科学の法則命題も世界記述でなく記述の形式を与えるものであるから、何も《語って》いない擬似命題である。記述の形式を与えるものは記述可能ではない。つまり《語る》ことができず、それらは有意味な言語において《示さ》れるしかない。倫理・価値・生に関する命題は、世界の事実・可能性を記述する命題ではなく擬似命題である。(4)これらは思考することができず、ただ沈黙のうちに生きることによって受け入れなければならないのである。やや割りきって言ってしまえば、「世界はどのようにあるのか」は世界の事実を問う質問であるから、問うことができるし答えもあるが、「世界はなぜあるのか」という問いは擬似問題であるから、問うことはできず、沈黙しなければならない。

ウィトゲンシュタインがどのような枠組みの中で「倫理は語るができない」と考えたか、明ら

かになったと思う。彼は確かに『論考』の中で倫理について語っているが、それは論理命題、数学の  
等式、自然科学の法則命題などと同様、倫理の命題が擬似命題であることを理解するために必要な  
だけであって、正しい理解を得た人にとっては不要となる《治療的言説》なのである。「私を理解する  
人は、私の命題を通り抜け——その上に立ち——それを乗り越え、最後にそれがナンセンスであると  
気づく。そのようにして私の諸命題は解明を行なう。(いわば、<sup>はしこ</sup>梯子をのぼりきった者は梯子を投げ  
棄てねばならない。) 私の諸命題を葬りさること。そのとき世界を正しく見るだろう。語りえぬもの  
については、沈黙せねばならない」(『論考』6.54-7) という結語はあまりにも有名である。

倫理について沈黙することを求めたウィトゲンシュタインであるが、「草稿」においては「幸福に  
生きよ！」(「草稿」1916年7月8日)、「幸福に生きよ！、ということより以上は語りえないと思われる」  
(「草稿」1916年7月29日)と声高に叫んでいる。『論考』によれば生や倫理について《語る》ことはで  
きないわけだが、だからといって、沈黙のうちに生きることが幸福であることではないし、沈黙のう  
ちに生きさえすれば幸福になれるわけでもないだろう。「幸福に生きよ！」と叫んだとき、彼は何を  
思っていたのだろうか？ どのようにしたら幸福に生きることができると考えていたのだろうか？  
この小論ではこの問題に私なりの答えを与えてみる。

## 2) 幸福に生きるとは？

ウィトゲンシュタインが「幸福に生きよ！」と「草稿」に書き記したのは、第一次世界大戦従軍中  
のことである。彼の配属された東部戦線は緊迫の度合いを増し、ブルシーロフ攻勢として知られるロ  
シア軍の大攻勢によって、ウィトゲンシュタインのいるオーストリア第七軍は将兵一万六千のうちわ  
ずか三千五百人しか残らない大敗走を喫した。その後、再びロシア軍と戦い、またも圧倒され、山  
の中へ命からがら後退することを余儀なくされ、後に虜囚に留め置かれることになる。生や幸福に関  
する彼の思想がこのような極限状況で考え抜かれたものであることを銘記しておこう。

「幸福に生きよ！」というウィトゲンシュタインの叫びは、「世界との一致」「生の意義への信仰」  
「幸福への意志」という3つの視点から考察せねばならないと思う。今までの解釈は、これらの重要  
性を見落としてピント外れだったり、このうちのひとつないしふたつしか取り上げていなかったりす  
る。この小論で取り上げられる「生の意義への信仰」の解釈はまったく独自のものであるので、特に  
賢者諸氏の批判を仰ぎたい。閑話休題。では、以下、順に説明していこう。

### a) 世界との一致

ウィトゲンシュタインは「草稿」の中で「人間は、いきなり幸福になることはできない」(「草稿」  
1916年7月14日)と述べている。また、「幸福に生きるためには、私は世界と一致せねばならない。そ  
してこのことが『幸福である』と言われることなのだ」(「草稿」1916年7月8日)とも述べている。  
「私」も「世界」も、そして「幸福」も、独自の意味を持たされている用語であるが、ここで「世界  
と一致する」とはどのようなことなのだろうか？ この句をどのように解釈するかが、「幸福に生きる」  
方法を理解するポイントとなる。この句を解釈するために『論考』の存在論からはじめよう。

世界は事実の総体である。私たちに与えられているのは事実であり、すべては現実である。可能  
性は世界の中には存在しない。<sup>(5)</sup>『論考』では、現実<sup>(5)</sup>に成立していることがらを事実と呼び、可能  
的な事実を事態と呼ぶが、事態は世界の中のどこを探しても存在していない。『論考』の基本問題、

「どれだけのことが考えられるのだろうか」という問いは可能性を問う問いであるが、では可能性とはどこにあるのだろうか？ 事実（現実）を事実のまま受け止めている限り事態（可能性）は姿を現さない、という考え方が『論考』の基本である。可能性を開くためには、現実を写し取る像とその像を分解して要素を取り出す操作が必要なのである。世界は事実から成り、事実をその像たる言語（命題）で写し取り、それを要素である名に分解し、その名を組み合わせて有意義な命題を再構成する。そうすることによってはじめて、現実には成立していない組み合わせ、すなわち可能性が見えてくる。事実を要素（対象）に分解し、それを事態へ構成するという《現実から可能性への展開》は、言語という現実の像において、事実を写した命題を要素（名）に分析し、それを可能な事態を表した新たな命題へと構成する作業を通して行なわれるより他に方法がない。

「世界と一致する」という句を解釈する時、「世界」が「現実＝事実の総体」に限らないことを理解する必要がある。思考の限界を見定めるといふ『論考』の目的に沿って、《現実から可能性へ》と展開せねばならず、そうすることによって「世界」は目の前の現実だけでなく思考の中に展開される可能性にまで広がってくる。「可能性＝事態の総体」という存在をウィトゲンシュタインは（世界と区別して）論理空間と呼ぶが<sup>(6)</sup>、論理空間から取り出されるのは事態の構成要素となる対象である。<sup>(7)</sup> 対象は、事実の構成要素でもあり、事態の構成要素でもある。対象は事実の中に埋め込まれているが、それを取り出す時、実体として姿を現す。可能性という無時間的な存在<sup>(8)</sup>を構成するものとして対象は不変なのであり、永遠の相たる世界の礎石なのである。

ここまですべてを簡潔にまとめてみよう。世界は事実の総体である。しかし私たちが考えられる世界はこれに留まらない。移ろい行く現実の世界だけでなく、不変の実体を基にした永遠の相の下の世界がある。これは思考の中に展開される世界（論理空間）であって、現実から可能性へと広げられた世界の謂いであり、現実の像を作り出すことによってのみ接近可能となる。像の分析を通して論理空間を構成する対象がはじめて姿を現す。このようにして見られた対象は、現実を構成する時空間の中に位置づけられた《生起し消滅するモノ》と異なり、無時間的な可能性を構成する《不変のモノ》である。ここに世界（論理空間）が永遠の相の下に姿を現す。

しかしながら「世界」の考察はこれで済むわけではない。ここから考察は独我論へと進んでいく。対象は事実から取り出されることをもう一度想起しよう。対象が取り出される事実は、私が経験する事実である（一方、可能な事態は、そのすべてを私が経験するわけでない）。対象のレベルでは可能的なものひとつとしてない。<sup>(9)</sup> 対象は、私が経験するこの事実（世界の現実と言語）において存在するものに他ならず、完全に私の経験に依存している。対象が私の経験の範囲にあるとすれば、世界および論理空間は「私の世界」として現れることになる（同時に、言語も「私の言語」として現れる）。《世界は私の世界である》、これが『論考』の独我論である。世界は徹底的に私の世界として現れる。誰にとっても共通の世界の中に私は生きているのではない。現実の世界も「私が生き、経験する私の世界」であるし、永遠の相の下に開かれる可能性の世界も「私が生き、経験することを基盤として構成される私の世界」なのである。この意味において、私は他人の世界を生きることはできず、自分の世界しか生きられない。私と他人との世界は寸分も相容れない。

しかし、これでもまだ「世界」の考察は十分と言えない。世界は私の世界であるということに加え、さらに「私は私の世界である」（『論考』5.63）とも言われるからである。この一節は独我論のテーゼではなく、主体否定テーゼだ。<sup>(10)</sup> これはどういうことか？

ウィトゲンシュタインは「主体は世界に属さない。それは世界の限界である」(『論考』5.632)という。この一節から考えてみる。先に、《現実から可能性への展開》を見たが、対象を取り出してくる時に、事実を経験する私が要請されたことを思い出そう。この私こそ主体に他ならない。つまり、論理空間が開かれた時には、客体と主体が同時に分化し、客体たる対象が世界の実体として位置づけられるのに対し、それに相関する主体はもはや対象ではない。よって主体はこのような世界に属さず、世界の中に位置を持たない。私は、行動し思考し表象する主体ではなく、存在論的経験の主体と呼ぶしかない。端的に言えば、私という主体は世界の一部ではなく世界の存在の前提なのである。

こうして、ただ存在論的経験の主体としてのみ規定される主体は、出会う対象領域によって決定される。出会う事実の異なる他者、つまり対象領域の異なる他者は、私と異なる論理空間を持つことになるから、私と同一人物ではない。私でさえも、生きていくうちに新しい対象と出会い、対象領域が異なれば、もはや私の通時的同一性は失われてしまう。つまり、私は私の世界としか言いようがない。

このように考えれば、「世界と生とはひとつである」(『論考』5.621)という一節は理解できるだろう。生は常に現在と共にある。生きるとは現在を生きることであり、過去を生きたり、未来を生きたりすることはありえない。私が生きて開く論理空間、これこそが私であり生であり世界なのである。

ここで、「私は世界とすでに一致しているのだから、誰もが生きているだけで幸福なのだ」とか「私と生と世界が一致することを見て取れば幸せになれるのだ」などと早とちりしてはならない。<sup>(11)</sup>先に、「倫理については語りえないのだから沈黙のうちに生きることが幸福になることだ、と短絡的に考えてはならない」旨を述べたが、それと同じことだ。このような、瞑想的・観想的・隠遁的な方法で幸福を手に入れられると考える解釈は不可能だと思う。ウィトゲンシュタインの思考が、戦時下、目の前には死がぶらさがっている極限状況で培われたことを思い出そう。彼は、安楽椅子に腰かけて思索を続けたのではないし、享樂的な生を謳歌する中で考えていたのでもない。生き残ることすら絶望的な状況の中、ウィトゲンシュタインは「生きたい」と心の底から願いながら考え抜いていたのである。「幸福に生きる」ためには、世界と一致するだけでは足りない。

## b) 生の意義への信仰

私たちは通常、世界の中で日々さまざまなきごとが起き、それによって私たち自身幸福を感じたり、不幸を味わったりすると思っている。例えば、身近な人が成功した場合のように多くの人が幸福を共にする機会があれば、挫折のうちに不幸を共有する機会もあるだろう。同じできごとがある人にとっては幸せであり、別の人にとっては不幸である場合もあるだろう。しかし、こうした常識的な見方がウィトゲンシュタインの考察において成立しえないことは明白である。彼によると、主体は動作主体・表象主体ではないのだから、世界の中で幸福や不幸を感じることはない。また、そもそも生の意義に関する問いは擬似命題とされるので、世界の中の事実によってその問いに答えることはできないのである。「世界の意義は世界の中にはなく、世界の外にある」(「草稿」1916年6月11日)。

言い換えてみよう。私たちは移ろい行く世界(事実の総体としての世界)に留まっている限り、現実を一步も超え出ることができない。《現実から可能性への展開》を果たしてはじめて、可能性としての無時間的な世界(論理空間)が開かれる。私にはどれだけのことが考えられるのかを知るためには、可能性の世界へ踏み出し、内側から思考に限界を引かねばならない。こうして、「何が考えられるか」が明白になり、「何が考えられないか」が《示さ》れることになる。この場合、いずれの世界にも、

つまり、移ろい行く世界（事実の総体としての世界）にも無時間的な世界（論理空間）にも、幸福が属する余地はない。幸福という生の意義、世界の意義は世界の外になければならない。

私たちは考えることもできない生の意義をどうやって知るのだろうか？ より正確に言えば、生の意義があるということ、幸福になりうるということ、そして生の意義がどのようなものであるかということ、こういったことをどのようにして知りうるのであろうか？ 答えはもちろん、「《示さ》れているのを見て取ることによって」である。ただ、移ろい行く世界に生きているだけであるならば、生の意義の何たるかはわからないであろう。可能性の世界である論理空間を開いてはじめて、思考の限界を知り、私たちにとって思考の外部といわれる領域があり、それは文字通り「考えることができない」領域であって、生の意義や幸福がこの思考の外部、「世界の外」に関わっていることを間接的に知るのだ。

生の意義、幸福についてウィトゲンシュタインはこのように書いている。「生の意義、即ち世界の意義を我々は神と称することができるのである」（「草稿」1916年6月11日）。「神を信じるとは、生が意義を持つことをみてとることである」（「草稿」1916年7月8日）。生と世界に意義があると考え、そのように生きること、それを可能にするのは「信仰」と呼ぶしかない。「世界との一致」だけでは、生が意義を持つことは導けない。論理操作のような絶対的な確実さを以て推論することはできないのだ。生が意義を持つことは「理解する」ことではなく、「信じる」ことなのである。幸福になるためには、「世界との一致」を理解した上で、生が意義を持つことを信じなければならない。この「信じる」は、信仰とも祈りとも呼べよう。だからこそ、「祈りとは世界の意義についての思想である」（「草稿」1916年6月11日）と言われるのである。

信仰（祈り）は、生きるという根本的な行為にも影響する。私たちは日常、自立的に生きていると感じている。しかし、「世界との一致」を理解し、生が意義を持つことを信じる主体は、自力で生きているという観念を持たない。そのような主体は、いわば恩寵の中で生かされているのである。<sup>(12)</sup> 説明してみよう。

ウィトゲンシュタインは「世界は私に与えられている」（「草稿」1916年7月8日）と言う。私は私の世界であるといっても、思い通りにできるという意味で世界を支配できるわけではない。「世界の出来事を私の意志によって左右するのは不可能であり、私は完全に無力である」（「草稿」1916年6月11日）。「世界は私の意志から独立である」（「草稿」1916年7月5日）。けれども、これは消極的な人生を勧めているのではない。ウィトゲンシュタインが言わんとしているのは、私たちは「生きている」と思いがちだが、実は「生かされている」ことを認識すべきだ、ということなのだ。私たちは、世界の中の偶然的な存在ではない。いてもいなくてもよい、ちっぽけな存在なのではない。私たちは、存在論的前提としての主体であり、世界を成立させている本質的な存在なのである。「世界との一致」を理解し、生が意義を持つことを信じる。少し乱暴に言えば、論理空間の中に自我が存在しないことを見取り、自我を投げ捨て、世界と合一化し、幸福を信じて生きる。これこそ、「生かされている」ということである。ウィトゲンシュタインはこのような《生の他力性》を次のように述べている。「我々は、ある見知らぬ意志に依存している、という感情を抱くのである。このことがどうあるにせよ、いずれにしても我々は或る意味で依存している。そして我々が依存するものを、神と称することができる」（「草稿」1916年7月8日）。「幸福に生きるためには、私は世界と一致せねばならない。そしてこのことが『幸福である』と言われることなのだ。この時私は、自分がそれに依存していると思われる、

あの見知らぬ意志と、いわば一致している。これが『私は神の意志を行う』と言われることである」  
（「草稿」1916年7月8日）。

### C) 幸福への意志

幸福に生きるためには、「世界と一致」し、生が意義を持つことを理解してもなお足りない。ここまでの世界は、価値中立的であるが故に、比喩的に言えば「無色透明」である。この世界に「幸福という彩り」を添え、世界を装わなければならない。

幸福や不幸は世界の中のできごとに関わるものではなかった。「幸福と不幸は世界に属することができない」（「草稿」1916年8月2日）。ウィトゲンシュタインによれば、幸福は世界に属さないし、生や幸福が意義を持つことを信じるかどうかは主体にかかっているのだから、幸福は世界の性質でなく、主体の特性となる。幸福や不幸は世界の中の性質でなく、主体の述語である、と言える。幸福であったり不幸であったりするのには世界やその中の事実ではなく、生きる主体なのだ。生きる主体の意志を通じて世界は幸福という彩りに染まりうる。

世界のできごとが幸福や不幸なのではない以上、幸福や不幸といっても世俗的なものを思い浮かべてはいけない。ここで言う幸福や不幸とは、紛れもなく「生きる意志」があるかないか、を意味している。「生きたい」と強く願う主体の意志、それこそが幸福のことである。生きる意志に充たされた世界こそ幸福な世界であり、生きる喜びの欠如した（ないしは不足した）世界は不幸な世界である。意志によって世界は別の世界となりうるのであり、いわば、世界全体が弱まったり強まったりするのである。「幸福な世界は不幸な世界とは別ものである」（『論考』6.43）。幸福である、満ち足りている、という喜びを感じられるか、あるいは、不幸だ、みじめだという絶望を感じてしまうか、それはひとえに、「生きよう」とどれだけ強く願っているかにかかっているのであって、世俗的な日常のできごとによって困っているのではない。

世界は、はじめから生の意義なり幸福なりを与えられているのではない。世界は幸福・不幸に染められた形で先験的に私たちに与えられるのではない。価値的に中立なものとして私たちに与えられるのである。その世界を私たちが主体的に幸福にする。世界の外部にある意義を世界に付与するのは主体しかいないのだ、と言ってもいいだろう。幸福であるべきだという倫理的判断を私たちが下す時、世界を幸福にするという一種の世界創造に主体は参与する。つまり、完成され与えられた世界に何の働きかけもしないのではなく、完成され与えられた世界に近づき、世界を「創られつつあるもの・在りつつあるもの」と捉えて自ら幸福な世界を在らしめるのだ。主体がそのように働いてこそ、「私=生=世界」は幸福なものとなるのである。ウィトゲンシュタインのことばを引用しておこう。「私が正しいとすれば、世界が与えられている、ということだけでは倫理的判断にとって不十分である」（「草稿」1916年8月2日）。「世界は私に与えられている。即ち私の意志は完成したものとしての世界に、全く外側から近づくのである」（「草稿」1916年7月8日）。幸福な世界というものが主体にとって受動的に与えられるものでなく、その中で「生きたい」と強く願い、生き抜くことによって幸福にしていく課題としての世界の在り方を示していること。それを認識し、実行すること。これが「幸福への意志」である。

この認識に達した時、私の生は比類のないものであることに気づく。こうして自らの生が比類なきものだと思った時、この「私=生=世界」はいわば芸術作品のように見えてくる。「倫理と美はひと

つである」(『論考』6.421)。「芸術作品は永遠の相の下にみられた対象である。そしてよい生とは永遠の相の下にみられた世界である。ここに芸術と倫理の連関がある」(「草稿」1916年10月7日)。世界を幸福に染めることは、芸術活動を行なうこととも等しい。「倫理と美はひとつであれ」ばこそ、次のことばは本質を衝いていると言えよう。「美とは、まさに幸福にするもののことである」(「草稿」1916年10月21日)。

主体は世界の本質的な前提であること。世界は私に与えられていること。その世界と私が一致すると理解すること。生の意義や幸福が世界の外部にあることと、私は神の中に生かされていることを信じていること。私の意志を通じて世界を幸福にしうることを知る。そして、生き抜き、幸福な世界を創り、在らしめ続けること。これぞ前期ウィトゲンシュタイン幸福論の要諦である。

## 終わりに

前期ウィトゲンシュタインが「幸福に生きよ!」と叫んだ時、彼が思っていたことは「世界との一致」「生の意義への信仰」「幸福への意志」であったという解釈を論じてきた。この小論の筆を擱くに当たり、『論考』『草稿』における幸福論の中で特に私が好きな一節を引用しておきたい。この文章は、砲弾の飛び交う下でウィトゲンシュタインが到達した結晶であるが、今や私たちはその静謐なる美しさを感じ取り、深意を理解することができるはずである。しかし、読み終わったらこの文章を葬り去ろう。そう、のぼりきった梯子は投げ棄てねばならないのだから。

この世界の苦難を避けることができないというのに、そもそもいかにして人間は幸福でありうるのか。まさに認識に生きることによって。良心とは認識の生が保証する幸福のことである。認識の生とは、世界の苦難をものともせぬ幸福な生である。世界の楽しみを断念しうる生のみが、幸福である。この生にとっては、世界の楽しみはたかだか運命の恩寵にすぎない。(「草稿」1916年8月13日)

## 註

『論考』の日本語訳は抄訳も含めると6種類ある。本文中、『論考』の訳は、『論理哲学論考』(野矢茂樹訳・岩波書店・2003年)を、「草稿」の訳は『ウィトゲンシュタイン全集1』(奥雅博訳・大修館書店・1975年)を利用した。

- (1) 思想家同士の比較研究を行なう場合、直接的証拠がない連関を論じるには細心の注意が必要である。ウィトゲンシュタインとの対比として、プラトンからハイデッガー、デリダ、果ては道元に至るまでさまざまな研究が重ねられているが、それらは玉石混交と言わざるをえない。中には、その「読み」自体こじつけに近いものもあれば、ウィトゲンシュタイン哲学の可能性を拡げられるかどうか疑わしいものもある。
- (2) 言うまでもなく、この小論の倫理・幸福論はこれまでの私の『論考』研究と一貫する主張をなしている。
- (3) 『論考』の序にあるように、思考に限界を引くためには、その限界の両側を思考できなければならない。つまり、思考できる範囲の内側で思考するだけでなく、思考できない位置(外側)で思考しなければならないが、それは「思考不可能なことを思考する」ことに他ならない。よって、思考に対してでなく、思考されたことの表現に対して限界を引くのである。
- (4) 倫理・価値・生に関する命題がなぜ世界の事実でないのか? ウィトゲンシュタインによれば、世界の事



実・可能性は「生起するもの」であり、であるが故に「偶然的なもの」である。倫理・価値・生に関する命題に相当する事実は「生起するもの」でなければ「偶然的なもの」でもない。それは本当のところ事実でなく、世界の外にあるものなのである。『論考』6.41, 「草稿」1916年6月11日を参照せよ。

- (5) 可能性は世界の中になくという解釈には多くの反対意見が予想されるが、この小論ではこの解釈の当否に触れない。
- (6) 論理空間を構成する要因（存在するモノとは限らない）は、事態とそれに対応する要素命題、要素命題の構成要素となる名とその対応物である対象、操作に基づく論理である。
- (7) 対象が何を指すかはさまざまに議論され、多くの解釈を生み出してきた。井原（1991）、井原（2005）参照。
- (8) 可能性はあくまでも思考においてしか実在しない。現実の世界の中になく以上、それらは偶然的に生起するものではない。事実（現実）は時間の中にあるが、事態（可能性）は時間の中になく、いわば無時間的である。可能性がなぜ時間の中になく無時間的なのか、については、井原（2005）参照のこと。
- (9) 『論考』の枠組みの中で可能な対象なるものも存在するという主張もある。詳細な議論についてはBradley（1992）、Cook（1994）参照。
- (10) 独我論のテーゼなら「世界は私の世界である」となるはずである。このポイントを初めて指摘したのは野矢（2002）である。
- (11) 「早とちり」と書いたが、このような解釈をしている研究は枚挙に遑がない。
- (12) これを「自力で生きる」と「恩寵によって生かされる」という＜能動—受動＞の二項対立と理解してはならない。これは二者択一を迫る、あれかこれかの対立ではない。「自力で生きる」と「恩寵によって生かされることで自分を活かす」という、異なる次元の対立とみなすべきである。

#### 主要参考文献

- 井原奉明 「Wittgenstein's First Transition in His Philosophy of Language」 *Sophia Linguistica* 30 pp.1-18 1991
- 井原奉明 「Wittgenstein as a Detenser, *Tractatus*' Ontology as Timeless」 *Time and History (Papers)* 28<sup>th</sup> International Wittgenstein Symposium pp.306-8 2005
- ウィットゲンシュタイン, ルートヴィヒ 『論理哲学論考』 野矢茂樹訳 東京: 岩波書店 2003
- ウィットゲンシュタイン, ルートヴィヒ 「草稿1914-1916」 『ウィットゲンシュタイン全集1』 奥雅博訳 東京: 大修館書店 1975
- 春日祐芳 『ウィットゲンシュタイン 哲学から宗教へ』 東京: ペリかん社 1985
- 鬼界彰夫 『ウィットゲンシュタインはこう考えた』 東京: 講談社 2003
- 黒崎宏 『ウィットゲンシュタインと禅』 東京: 哲学書房 1987
- 永井均 『ウィットゲンシュタイン入門』 東京: 筑摩書房 1995
- 野矢茂樹 『ウィットゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』 東京: 哲学書房 2002
- 藤本隆志 『ウィットゲンシュタイン』 東京: 講談社 1998
- 星川啓慈 『宗教者ウィットゲンシュタイン』 京都: 法蔵館 1990
- 細川亮一 『形而上学者ウィットゲンシュタイン』 東京: 筑摩書房 2002
- ワイナー, デイビッド・エイブラハム 『天才と才人』 寺中平治/米澤克夫訳 東京: 三和書籍 2003
- Bradley, Raymond, *The Nature of All Being*, Oxford UP, 1992
- Cook, John W., *Wittgenstein's Metaphysics*, Cambridge UP, 1994
- Creagan, Charles L., *Wittgenstein and Kierkegaard*, Routledge, 1989
- Wittgenstein, Ludwig, *Collected Works*, Past Masters, Humanities Database, IntelLex, 2002